

●分水嶺		
◇「砂漠の国のアリス」	竹内海南江……	3
●連載／教育のひろば		
◇伝えていますか？ いのちの尊さ	菅野静二……	4
●新連載／道徳的なひとり立ちを願った試み	道徳教育迷求会	
◇生命尊重の授業を通して	……	6
＊「ぼくのものがたり」を活用した授業研究	……	10
＊「妹の手紙」を活用した授業研究	……	14
●新連載／道徳教育の未来像		
◇道徳教育の充実で学校教育の再生を	押谷由夫……	18
●新連載／道徳のチカラ		
◇人間関係力と道徳①	土田雄一……	22
●道徳教育への期待		
◇よりよく生きる力を育む	佐々木太恵子……	24
●道徳教育研究会の取り組み		
◇栃木県の道徳	渡邊延幸……	25
●新連載／こころの行方		
◇善意を踏みにじる	市川宏伸……	26
●新連載／やさしく読める道徳用語		
◇「生命尊重」	立川修司……	27

本文中の勤務校は平成19年3月31日現在のものです。

●著者プロフィール●



菅野静二先生▶東京都公立小学校長として14年間勤務し昨年定年退職。幼稚園長・中学校長兼務を経験し、幼・小・中を通じた教育の在り方を考え実践してきました。「いのちの教育」をライフワークに若い先生の指導や講演活動等を行っています。



佐々木太恵子先生▶3月に定年退職しましたが、昨年度、大分県小学校道徳教育研究会会長としていろいろな方と出会い様々な刺激を受けました。すばらしい出会いに感謝したいと思います。最近では日本の伝統文化の魅力にとりつかれています。



押谷由夫先生▶大学に出て早6年目を迎えています。先生方へのご恩返しのひとつとして人間教育学専攻の大学院と人間教育研究所の設置があります。先生方に自信をもっといただくことが何より大切です。



渡邊延幸先生▶資料の枠組みにとらわれず、自由に道徳的価値を表現する活動では子どもの価値が顕著に表れる。また、様々な学び合いは、お互いを高め合おうという意識をうむ。新たな試みは、子どもを、そして道徳の授業を確かに変える。



土田雄一先生▶千葉大学にきて3年目。昨年、「人間関係づくりの演習」「人間関係づくりの教材開発」の講座を開講。体験と理論を重ねた授業をしましたが、予想以上の学生パワーに感動しました。今年は初の卒論指導を頑張ります。



立川修司先生▶「やさしく読める道徳用語」の解説という大役を、お引き受けいたしました。タイトル通りに、読者のみなさまにお読みいただければと願っています。率直なご意見ご感想を、お待ちしております。

■『子どもの道徳』へのご意見・ご感想をお寄せください。

〈本文イラスト〉原 恵美子

「砂漠の国のアリス」

レポーター 竹内 海南江



プロフィール

「世界ふしぎ発見！」(TBS系)のミステリーハンターとして20年間で97カ国を訪問。1年のうち半分近くは旅に出る生活を続けている。春にはエースとのコラボでリュックをプロデュースするなど活躍の場を広げている。

18年前、はじめて訪れたアフリカはマリ共和国、サハラ砂漠の中にあるトゥンブクトゥという町の取材でした。パリ・ダカルラリーの中継地点として知られているこの町は15・16世紀に栄え、黄金の帝国と噂された首都でした。それは、イスラム教徒であった王様が聖地へ巡礼にでかけたところ、ふるまう黄金の量に、その当時の金の相場が変わってしまったほど、町には膨大な黄金があったそうです。しかし、砂漠に黄金の国？と思われる方が多いはず。実はその繁栄の秘訣は、教育にあったのです。当時トゥンブクトゥは、交易の中継地点でした。そこで大学を始めとする教育機関や、膨大な書籍を所蔵した図書館など、教育に関する施設を充実させ、優秀な人材の育成に力をいれたのです。

首都バマコより4輪駆動の車で、2泊3日。近くの町のガオからは、僅かな轍を頼りに、砂漠のオフロードを12時間走り、ようやく到着です。記憶に残っている町の印象は、砂丘に囲まれた、とても静かな時間が流れているような感じでした。まず広場へと向かいました。その途中、一人の少年に声をかけられたのです。10歳くらいの可愛い男の子。公用語がフランス語なので、まず挨拶の後「フランス語できる？」「できない」と言うと「じゃあ英語は？」「ちょっとだけ」と答えると「僕と同じだね」と言ったのに「どこからきたの。何しにきたの。」と、驚くほど綺麗な発音、流暢な英語でたくさんの質問をしてきたのです。そんな少年の名前は「アリス」生まれも育ちもトゥンブクトゥ、外の世界を知りません。好奇心あふれるアリスは、訪れる

外国の人達から情報を得て、世界の広さを想像していたのでしょうか。そして、そんな知的好奇心を満足させるために彼が取得したのが英語。でもそれは、学校に行き勉強したのではなく、新しい出会いの中で身につけていったもの。「君はもう、僕の友達だからね」そんなかっこいいセリフとともにお別れした翌日、なんとアリスが、ホテルのロビーにいるではありませんか。アリスの笑顔に「僕の友達」と言った、あの時の言葉の強さを感じました。

それからというもの、アリスは必ずロケ地に現れました。驚くべきことに、詳しい場所の説明をしていないのに、町から少し離れた砂漠にも、アリスは私に会いに来てくれたのです。「なんでロケ地がわかるの？」と聞いてみたら、「なんとなく」とのこと。短いロケでしたが、アリスから多くのことを学びました。なかでも、おもてなしの心と町に対する誇りに感動しました。

トゥンブクトゥは、現在世界遺産に指定されていますが、悲しいかな、危機的遺産です。それは、このままでいくと自然消滅してしまう可能性があるということです。町のモスクで出会った青年が「いつかは、砂丘に飲み込まれてしまうだろう」と言っていた言葉を思い出します。砂漠の少年アリス、「今君は、どこにいますか？」

伝えてありますか？ いのちの尊さ —「いのちの学習」を通して—

元新宿区立四谷第六小学校校長 菅野 静二

今日、学力の低下が大きな問題になっています。1月24日に出席された教育再生会議の第一次答申でも「ゆとり教育」の見直しが掲げられ、教科書の薄いことが問題であり、授業時間も10%増やす方向で具体的検討に入ると報道されています。しかし、教育が時の政府の方針によってそんなに揺らいでいいものでしょうか。

新宿区立四谷第六小学校ではいつの時代でも揺らぐことのない教育の原点として、「いのち」を捉え、学力向上を図る研究を積み重ねてきました。

いのちの学習は、「いのちは大事だから大切にしましょう」という抽象的なスローガンの教育ではありません。奇跡的でかけがえのないいのちを得た私たちが、どう生きていったらよいか、という「生き方」の教育です。

子どもは、生まれてくる国も、場所も、時代も、親も選ぶことができません。一人の人間がこの国の、この場所で、この時代に、この両親から生まれてくる確率はまさに「奇跡」です。親は二人いますが、その親の親と辿っていき、20世代前まで遡ると約210万人の親がいたことになり、そのうち一人でも子どもが生まれる前に死んでしまうと、今のこのいのちはありません。人間は、生まれてこれまで、また、これから死ぬまで決して一人で生きていくことはできません。そして、人間はすべて他の生き物のいのちを食して生き続けます。なぜこんなことが許されるのでしょうか。

今、学力低下論の中で、学力の国際比較や点数化できる学力ばかりが問題になっていま

す。でも、本当に問題なのは生きる意欲を喪失している80万を超えるといわれるニートや人のいのちをもて遊ぶような犯罪の低年齢化、自らのいのちを絶ってしまう若者の増加です。学ぶことの意義を見出せず、生きることに希望も意味も見出せない子どもたちに「学力向上」だけを叫んでも無意味です。

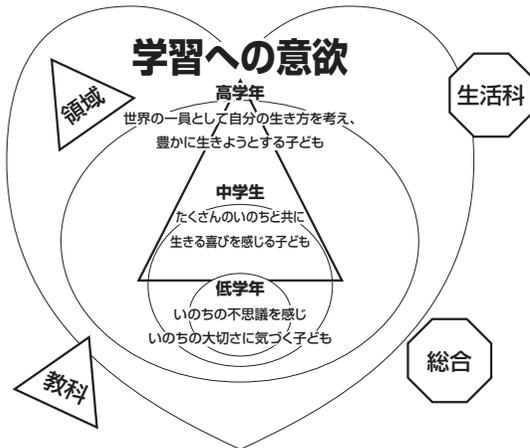
私たちは、いのちの学習を通して、いのちを様々な側面から考えてきました。そして、発達段階に応じて学習プログラムを作り出しました（資料1）。

その中で、一人ひとりのいのちには、そのいのちにしかできない役割があるのだということに気づき、また子どもたちに気づかせることが重要であるとの結論を得ました。すなわち、自分のいのちの役割を見出し、その役割を果たすことのできる人間に育てることこそ「いのちの教育」ということになります。そして、一人ひとりが、自分のいのちの役割を見つけ出すことのできる力こそ「本当の学力」であると考えています。

「いのちの学習」を組み立てる視点としては、子どもが自ら誇りをもち、自分がどのように生きていったらよいかを考えることのできる基礎を培うために、

- ① かけがえのないいのちを受け継いだことに対する驚きと気づき
- ② たくさんの人や地球のおかげでいのちを引き継いでいけることに対する喜び
- ③ 存在する自分を自認し好きになる自己愛（自尊感情）
- ④ 自分が社会にとってかけがえのない存在

資料1 / 四谷第六小学校「いのちの学習」プログラム



資料2 / 四谷第六小学校 6年間のカリキュラム

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
いのちの不思議を感じ！	いきもの大ずき	赤ちゃんてかわいいね みんな赤ちゃんだった		友達と遊ぶことの楽しさ・大切さ		
たくさん生きる喜びと共に	いのちって温かい (小動物の飼育)	大きく変わったわたし	元気パワーアップ	私たちは一人ひとり違うから大切なんだ		
かに生きる喜び		カブトムシの飼育 (一生のサイクル) (生と死)		心のバリアフリー	「いただきます」の意味とは？	
世界の一員として豊かに生きようとする				地球市民として生き方を考える	食がつかないいのち	世界中の私たち
				四六フレンドグループの活動 (異学年交流活動)		

であることに対する自覚（自己有用感）
⑤自分の個性、能力を伸ばすことによって次の時代のために役に立つ存在として豊かに生きようとする力(学ぶことの意味)とし、6年間のカリキュラムを作成することにしました（資料2）。

6年生は、「世界の中の私たち」というテーマで学習を進めます。

世界の12歳の子どもたちはどんな生活をしているのだろう、という課題についてそれぞれが調べました。すると、学校に行けない子や武器を持って戦わされている少年兵士のこと、ストリートチルドレンのこと、12歳で結婚し子どもを育てている子、飢えや病気に苦しんでいる子等々、様々な12歳がいることに気づきます。学んだ子どもたちは、自分たちに何かできることはないかと考え始めます。ユニセフやシャプラニール、シャンティ国際ボランティア会等の活動を知り、国際ボランティア活動に取り組み始めます。自主的な募金活動を始め、古切手・古本・使用済みプリペイドカードや書き損じはがき集め等、全校に呼びかけ、活動を展開していきます。ある程度成果もあり、自分たちでも何かできた喜びを感じ始めたところで、新たな課題とぶつかります。「今までの活動で、世界はどう変わったのだろうか。」「ストリートチルドレン

は何人減ったのだろう。」「ボランティア活動というのは豊かな国の豊かな人たちが施してあげる活動なのだろうか。」「……子どもたちはさらに考え討論し、3つの結論を出します。「自分たちだけでは世界は変わらない。」「もっともっとたくさんの人に呼びかけ、みんなで考えるようにしなければならない。」「今だけちょっとだけの活動では何も変わらない。これからずっと続けていかなければ世界を変えることはできない。」そして、何より今、自分たちでできることは限られた本当に小さなことでしかない。本当に自分の役割を見つけ出すためには、もっともっと勉強しなければだめだ。今学ぶことこそ社会に貢献できる何かを見つけ出す力になるのだということに気づいたのです。

子どもたちは「僕（私）は学びます。学び続けます。自分のいのちを輝かせるために。社会のために何ができるかを考え、自分のいのちの役割を見つけ果たせるようになるため学びます。世界中の子どもたちが自分たちと同じように幸せに生きることができるようになるまで学び続けます。」と宣言し、小学校を卒業していきました。その研究・授業実践は19年度に引き継がれ、6年生たちは、新たな決意を胸に中学校に羽ばたこうとしています。

生命尊重の授業を通して

道徳教育迷求会

1. 授業研究の目的と内容及び研究方法

① “子どもが道徳的にひとり立ちするための道徳授業”のあり方を探る—研究目的

道徳の授業では、教師が資料をあらかじめ準備し、登場人物の生き方をどのように考えるかについて話し合わせる時と場を設定する。そこでは子どもたちが、友だちや教師の考えを聞いたりして、人間らしい生き方を拡充していくことを期待している。さらに、拡充された人間の生き方と自分の生き方を重ねて、新しい自分を切り拓いていくように教育する。

それは、「人間らしい生き方がどんな生き方かわかる」ことを、からだの浅いところに留め置かないで、身にしみて心にまで達するように教育したいとする教師の教育的意図に立って行われているわけである。ゆえに子どもが道徳的にひとり立ちしているとはいえない。

教師の手によって資料や学習の時と場が設定されなくても、子ども自身が自分の手で資料を選択し、その資料から人間らしい生き方を学び取っていく姿こそ、道徳的ひとり立ちであり、それが道徳教育の最終目的であろう。したがって、道徳の授業は、子どもが道徳的なひとり立ちをするための準備段階であるということができよう。

文部科学省によって全国の小・中学生に配布された『心のノート』が、「このノートは、子どもへのプレゼントです」と強調されているのは、子どもの道徳的なひとり立ちを願ったことであろう。

② 子どもが道徳的なひとり立ちをするために、4つの方法を提案する—研究内容1

子どもが道徳的なひとり立ちをするためには、道徳の授業に子どもがもっと積極的に取り組む教育方法を講じる必要がある。ここでは、そのための4つの方法を提案したい。

- a. 発問の数をできるだけ少なくして、学習の焦点をこの一点に迫る発問に絞る。
- b. この一点に迫る発問に対する子どもの考えを確立させるための時と場を確保する。
- c. 子どもの考えを分析・比較・総合させて、道徳的価値から検討させる。
- d. この授業で自分は何を学んだかを、一人ひとりの子どもに要約させる。

本研究は、以上の方法を、生命尊重の授業を通して、その妥当性を検証するものである。

③ 資料『ぼくのものがたり』(2年)と『妹の手紙』(6年)は、生命尊重の指導資料として妥当であるかを検証する—研究内容2

この検証を進めるには、生命尊重をどのように捉えるかが重要になるが、次のような観点から捉えることにする。

- A. 人間の力の及ばない命であることを自覚する(神秘性・偶然性)
- B. 先祖から受け継がれてきた命であることを自覚する(連続性)
- C. 限りのある命であることを自覚する(有限性)
- D. かけがえのない命であることを自覚する(唯一性)
- E. 人と支え合っている命であることを自覚

する（関係性）

F. 日々たくましくなっていく命であることを自覚する（発達性）

生命尊重を上記のように具体的に捉えて指導しなければ、「生命を大切にしましょう」というスローガンを掲げるだけの指導に終始すると思われる。

研究内容2の副次的なこととして、2つの資料はA～Fの中のどの観点に迫ることができるか。また、どの学年の指導資料として妥当であるかについても検証したい。

④実践記録を多くの学校から収集して、研究結果に一般性をもたせる—研究方法

この研究のために授業を行い、授業記録を収集し検討する。

この会に参加した者は次の通りである。

青柳和宏(横須賀市立武山小)・小畑雅一(横須賀市立衣笠小)・江藤幸恵(相模原市立串川小)・風間朝子(八戸市立日計ヶ丘小)・加藤宣行(筑波大学附属小)・竹井秀文(岐阜大学附属小)・高野裕司(横須賀市立武山小)・寺田智(秦野市立渋沢小)・内藤映子(相模原市立鳥屋小)・西野幸子(相模原市立藤野小)・脇野さやか(相模原市立鳥屋小)

以下、4つの方法について提案する理由を述べ、授業研究の結果を述べることにする。

(※上記勤務校は、H19年3月31日現在)

2. 4つの方法を提案する理由

①発問の数をできるだけ少なくして、学習の焦点をこの一点に迫る発問に絞る

→子どもは何が問題であることをしっかりとつかみ、積極的に考えようとするのではないか

一般的な道徳授業の発問は、中心発問・補助発問によって構成されているが、このような発問をすることによって、子どもが問いをもって積極的に学習するようになることを期待しているわけである。ところが、発問が多すぎてすべての発問が子ども一人ひとりの問いになっていないことが多い。結果的に、子

ども不在の授業になるのである。

補助発問は、子どもが中心発問を考えやすくするための発問であるが、補助発問を多発するために、何が中心発問であるかが子どもに見えなくなっているように思われる。

本当に補助発問が必要だろうか。中心発問（私は、この一点に迫る発問と呼んでいる）だけの授業は考えられないのだろうか。子どもが中心発問だけでは理解できないのであれば、まずこの一点に迫る発問をし、「この問いを考えるにはこんなことを明らかにしておく必要があるね」と最小限の情報を確認する学習が望ましいのではないだろうか。

このように、この一点に迫る発問に焦点化することによって、子どもは、今、何が問題かをしっかりとつかむだけでなく、じっくり考える時間も確保できるのである。

②この一点に迫る発問に対する子どもの考えを確立させるための時と場を確保する

→一人ひとりの子どもが自分なりの考えをしっかりと確立できるのではないか

道徳の授業では資料を通した話し合いによって、子どもが人間の生き方を拡充していくことを期待している。それは、資料を読んで学ぶ・友だちの読みから学ぶ・教師の読みから学ぶ・それぞれの読みを話し合った結果から学ぶ等によって、一人ひとりの子どもが自分の考えを拡充（いろいろな見方・考え方に広げたり、一つの見方・考え方を内面的に深めたりする）していくことを期待しているが、その「もと」になるのは、自分の考えである。

現在一般的に行われている道徳の授業では、子どもが考える時間はきわめて少ない。子ども一人ひとりが自分の考えを確立しないまま、一部の条件反射的な反応を取り上げた話し合いに終始しているように思われる。

「自分は、このように思う」という自分の考えが確立されていない状態で話し合っても、拡充すべき「もと」がないから、もの見方・考え方が拡充するはずはない。

そこで、自分の考えを確立させ、それをノートに書かせる時と場を確保することが大切になろう。教師が子どもと同じ発問をされたとすれば、どれほどの時間を要するかと、自分を重ねて考え、その2倍以上の考える時間を確保する必要がある。

③子どもの考えを分析・比較・総合させて、道徳的価値から検討させる

→自分の考え方を認識したり、他者の考えを聞いて自分の考えを拡充したりしていくのではないか

一人ひとりの子どもの考えを確立させる時と場を十分に確保すれば、次はその考えを表現させる段階に入る。

子どもの考えを表現させる方法は、一般的には発表という方法がとられているが、この他にも、カードによる表現・挙手による表現・起立による表現・黒板に書かせるという表現・グループの話し合いによって代表者が発表するという表現等、多様な表現方法を学年の発達を考慮して行う必要がある。

こうして表現された子どもの考えは、多様である。ねらいにそった考えやねらいからはずれた考え・表面的な考えや内面的な考え・局部的な考えや大局的な考え・理解しにくい考えや理解しやすい考え等々である。特に、ねらいに関して、生命尊重の指導に例示すれば、生命の神秘性を捉えた考え・連続性を捉えた考え・有限性を捉えた考え・唯一性を捉えた考え・関係性を捉えた考え・発達性を捉えた考え等多様である。

ところで道徳の授業では、これらの子どもの考えを、理解し合ったり、比較し合ったり、まとめたりすることなしに、次の活動に入ることが一般的である。これでは、自分の考えはどのような道徳的価値をもっているか、友だちの考えにはどのような道徳的価値があるか、教師の話にはどのような道徳的価値があるか等について、十分な認識をしないまま次の活動に入ることになる。結果的には、他者

の考えを聞いて自分の考えを拡充するという学習は成立せず、何のための学習であるかという学習の意味をなさないことになる。

なぜ、子ども一人ひとりの考えをもとに検討し合わせる学習を行わないのであろうか。「切磋琢磨」「自分を磨く」「学問は人間関係を超えて対等である」という学問の基本は、死語になってしまったのであろうか。

いかなる理由があろうとも、しっかりした検討を行う必要があるだろうが、どのような方法が考えられるのであろうか。

論理学では、人間の思考を右表のように、分析・比較・総合という観点から捉えることがあるが、この思考法は、道徳の授業にも適応できると思われる。

この方法を道徳の授業に具体化すれば、次のようになる。

分析——「Aさんが言いたいことはどんなことですか」「それを○〇と言いついていいですか」「Bさんが言いたいことについて誰か代わって説明してくれませんか」「Bさんは△△のような考えをもっているようですね」等によって、子ども一人ひとりの考えを明らかにさせ、理解し合わせる学習が考えられる。

比較——「Aさんと同じ考えを持っている人はいませんか」「BさんとCさんの考えを比べてみましょう。同じところはありませんか。違うところはありませんか」「カードに書いた自分の考えはどの仲間に入るか考えてみましょう」「黒板の同じところに自分のカードを貼りましょう」等、友だちの考えと比較させることによって、それぞれの考えを明らかにさせたり、共通点や相違点を理解し合わせたりする学習が考えられる。

総合——「AさんとBさんの考えは同じですね。どんなところが同じであるといえますか。まとめてみましょう」「まとめの言葉は、○△でいいでしょうか。他にいい言葉はありませんか」「この言葉の他にいい言

分析・比較・総合について

分析	それを構成する要素を分解すること	自分や友だちの考えの真意を探らせ、理解し合わせること
比較	ものごとを比較して共通点や相違点を明らかにすること	自分や友だちや教師の考えを比較させ、共通点を見つけたり（抽象）、共通しないものを捨て去ったり（捨象）すること
総合	関係するいくつかのものを集め、一つの統一体にする	共通点を道徳的価値という観点からまとめること

葉を探しましょう」等、子どもの考え方の共通点を道徳的な価値からまとめさせていく学習が考えられる。

このような学習によってまとめられたものを、生命尊重の指導に例示すれば、「Aさん、Bさん、Cさんの考えは、先祖から受け継いできた命だから大事にしようということだね」「Dさん、Eさん、Fさんの考えは、お父さんやお母さんに守られてきた命だから、感謝し命を大切にしたいということだね」「Gさん、Hさん、Iさんの考えは、自分が死んだり怪我をしたり病気になったら、家族だけではなくたくさんの人が悲しむから、いつまでも健康でいようということだね」「Jさん、Kさん、Lさんの考えは、一日一日と心も体も健康でたくましくなっていくから、この勢いで、もっと健康でたくましくなりたいということだね」のように総合されるのである。

ここでは、教師主導でまとめる学習を例示したが、子どもがまとめる学習になれば、道徳的なひとり立ちという点からみて最も望ましい。しかし、子どもがまとめる学習を一気呵成に要求しても無理であろう。教師主導の学習から子ども中心の学習へと段階的に高めていく必要がある。

また、実際の話合いでは、分析・比較・総合が前後しながら行われるのが自然であろうが、このようにまとめられてくると、子どもは、自分の考えを自覚するだけでなく、他者の考えの影響を受けて、自分の考えを拡充

していくのである。

④この授業で自分は何を学んだかを、一人ひとりの子どもに要約させる

→自分の考え方がどのように変わったかについてまとめたり、これからこのような生活をしたという意欲をもったりするのではないか

以上の学習によって、一人ひとりの子どもは、人間の生き方を拡充していくはずであるが、その学習を自分の心にしっかりと留める段階にまでは至っていない。そこで、この授業で自分は何を学んだかを一人ひとりの子どもに要約させる活動が必要になる。

これは終末といわれている過程であるが、一般的には教師の説話等によって、「先生もそうです。みなさんもがんばりましょう」と精神を鼓舞する活動が多い。

これは子どもが道徳的にひとり立ちするという授業の最終的な目的からほど遠い。

他者による精神の鼓舞ではなく、「よく生きようとする自分の生活にとって、〇〇の生き方は大切である」という内容的な自覚が、道徳的なひとり立ちのエネルギーになる。

子どもたちが、道徳教育は、本日の授業で終わりではなく、「いよいよ本日の授業から始まるのだ」という認識をもって、よく生きていくようでありたいし、教師もそういう大局的教育観をもって道徳教育に取り組まなければ本物の人づくりはできない。

（文責・淑徳大学名誉教授 新宮弘識）

「ぼくの ものがたり」を活用した授業研究

道徳教育迷求会

I 道徳的なひとり立ちを願った道徳授業の

4つの新しい試みについて

(1) 発問の数を少なくして、学習の焦点を「この一点に迫る発問」に絞る。

- ① まずは研究会のメンバー全員で資料を読み合い、そこから見えてくる価値観を出し合う中から「この一点に迫る発問」について話し合った。その結果、「ぼくのもりもりパワーはすごいね、たつやくんは光っているね。このパワーはどこから生まれてきたのだろう」ということについて子どもたちに問いかけよう、ということになった。
- ② 授業者は「この一点に迫る発問」をする前に、補助発問として「たつやくん」の歩んできた道のりを子どもたちに黒板へ書かせたり、要所要所での出来事について簡単に上げたりした。しかし、従来のように一つ一つの場面をたどりながら、登場人物の心情を問うような発問はいっさいしなかった。時間にすると5分ほどである。その後、すぐに「この一点に迫る発問」をし、15分から20分ほどの書く時間を確保した。そのような投げかけに対して、授業を行った1年生、2年生の子どもたち全員が真剣に取り組み、全員が自分の考えを書くことができた。
- ③ 子どもたちの書いたものを読むと、どれも真剣に向き合って記述していることがわかり、中にはふだんはほとんど何も書かない子どもが、今回は見違えたようにしっかりと記述している実態も明らかになった。このことより、子どもたちの

ほとんどは発問の意味を理解して、反応することができ、前向きに取り組んだといえる。

- ④ 発問は、資料の時系列にしたがって登場人物の背景を把握したり、心情を追っていったりするパターンが一般的である。今回はそのような形をとらず、発問を一本に絞り、時間的にも内容的にもじっくりと深く追求することを念頭においた実践を試みた。その結果、日ごろ、あまり考えない、考えられないことが多いために、積極的に参加できていなかった子どもたちも、真剣に取り組むことができたようである。

(2) 「この一点に迫る発問」に対する子どもの考えを確立させるための時と場を確保する。

- ① 4人グループで10分話し合う時間をとり、その後1人で書く時間を確保した。本時（1次）はここまでで終わりとした。
- ② その結果、子どもたちは次のような考えを確立することができた。

たつやくんのもりもりパワーはすごいね。
このパワーはどこから生まれてきたのだろう。

<1年生の反応>

- a. お母さんに守られたから、力強くなって元気になることができた。
- b. お母さんがなぐさめてくれたから、元気になることができた。
- c. みんな守ってくれる、だんだん強くなる。元気いっぱい。
- d. お父さん、お母さん、家族、仲よし、み



▲2年「30 ぼくのものがたり」

いろいろなことがあって
ったじぶんを たしかめて みました。

力には、
力と
力が ある。

びょうきや けがを したとき
ほしくて してん中に のめました。
でも、わんしゅうちゅうに ころんで、
ひきき すばいして しんがら
かぜを ひいて、せきが ながけ
とまりまわりました。

すきらいを
しないで
なんでも
たべたから、

おじいちゃんも
かけっこが
すきだったんだった。

早く、早くも
そうがなあ。

生きる 力

お母さんか
お父さんが
ねないで
かんじょうして
くれたんだった。

○みなさんも、「ぼく・わたしのものがたり」を
つくりましょう。

●どんなことが ありましたか。「せいちょうの から」の カード
をつかって おまじょう。

(赤ちゃん)のころ	(あるきはじめ)のころ
(びょうきを した)とき	(けがを した)とき
(はいいくえん・ようちえん)のころ	(にゅうがく)のころ
()のころ	()のころ

●どんな「生きる 力」が あったからでしょう。

- んな家族。
- e. みんなに見守られて、力を出すことができた。
 - f. 「みんなありがとう」という気持ち。
 - g. お母さん、お父さんが大事。愛が大事。
 - h. 嫌なことからも逃げないで、自分から始めたからがんばっていきける。
 - i. できなくても最後まであきらめないから、ずっと成長した。
 - j. たいへんなことにも正々堂々とぶつかっていったから。
 - k. 自分から逃げない。あきらめないでがんばるぞ。
 - l. 逃げないで自分からいったから元気になった。
 - m. いっぱいがんばった。正々堂々と勇気があるから。

<2年生の反応>

- a. たつやくんが大きくなると強くなる。
- b. 大きくなってできることがいっぱいある。どんどん強くなっている。
- c. もうすぐ3年生になる。パワーがわいてきた。3年生でもがんばるぞ。
- d. 赤ちゃんからパワーアップしてきた。

- e. お母さんから命をもらったから。
 - f. お母さん、お父さん、友達からパワーをもらったから。
 - g. 家族や友達のパワーをもらって大きくなっていった。
 - h. がんばって歩いた。いっぱい遊んだ。全部がんばった。
 - i. たいへんなこともあきらめなかった。
 - j. いっぱい困難を乗り越えてきたから。
 - k. けがや病気をしたり、立てるようになったりして大きくなっていく。
 - l. 最初は力がなかったが、いろいろがんばったから光ってきた。
 - m. 何でも食べて力をつけてきたから、いろいろなことに立ち向かえるようになった。
 - n. いろいろなことを勉強してきたから。
 - o. 自転車とかで転んでも、できるようになるとうれしいからパワーアップしてきた。
- ③このような反応はじっくりと資料と向き合い、自分自身との経験とも重ね合わせて出てきたものであり、気のきいた特定の子どもから条件反射的に発せられた表面的な発言と一線を画すものであると考

【「ぼくのものがたり」を生命の価値構造で分類した表】

子どもの言葉でまとめた場合	道徳的価値（生命尊重）から まとめた場合	子どもの反応例	
		1年	2年
お父さん、お母さんに生きていく力を もらったから（受け継いだパワー）	先祖から受け継がれてきた命 生命の連続性		e
お父さん、お母さん、家族や友達に守 られてきたから（守られたパワー）	支え合っている命 生命の関係性・社会性	a～g	f g
つらいことがあっても逃げないであきら めなかったから（心のパワー）	日々たくましくなっていく命 生命の発達性・発展性	h～m	i j l n o
一日一日と強くなって病気やけがに勝 てるようになったから（育つパワー）	日々たくましくなっていく命 生命の発達性・発展性		a b c d k
よく食べたり、運動したりして身体を 鍛えたから（身体のパワー）	日々たくましくなっていく命 生命の発達性・発展性		h m

える。また、「ぼく」の絵を黒板にはり、子どもの発言を受けるたびにピカピカパワーを大きく描き加えていくというような板書の工夫をすることにより、子どもたちはパワーが増えていく様子を実感しながら新たな気づきを増やし、意欲的に学習に参加できていた。

(3) 子どもの考えを分析・比較・総合させて、道徳的価値から検討させる。

① このような考えを出し合うことにより、子どもたちは自分の考えと友達のことをすりあわせ、同じところは「このところこの考えは似ているね」と納得し合い、異なるところは「そういう考えもあるのか」と補い合い、1つの価値観を構築していった。

この学習活動は1次を受けた2時間目(2次)となる。展開は指導者によって多少の違いはあるが、主に次のようなものである。

*前時の授業を受けて指導者が子どもたちの考えを一つ一つ書いたカードを用意し、それを提示して子どもたちに置き方を考えさせる。子どもたちは生命にはさまざまな観点があることに気づ

き始める。

*分類したものをしながら、キーワードといえるような言葉を導き出し、「そういえば自分もそうだった」などというように、自分と重ね合わせて資料を読むようになり、そのような力(パワー)は自分たちにもあるということがわかり始めたようであった。

以上をまとめたものが、上の表である。

- ② この表からは、生命の連続性、関係性、発達性等が見られるが、一方で生命の神秘性・有限性・唯一性は見られない。これがこの資料のもつ特性であると考えられる。すなわち、生命尊重の内容項目は、1つの資料や一度の授業ですべてを学習できるものではないということである。これはどの内容項目に関してもいえることではあるが、資料のもつ特性や内容をよく吟味し、その資料で指導できること、他の資料で補わなければならないことを指導者がしっかりとつかんでおく必要がある。その上で学年ごとの発達段階・系統性などを視野に入れながら指導を積み上げていくことが要求される。
- ③ 通常の授業では、このような多様な内容構造が出されても、それをひとまとめ

にして「命って大切だね」「これからも命を守っていこうね」などと一括りにして終わりにしてしまうことが一般的である。確かに命の大切さについて考えてはいるのであるが、いまいち漠然としていて、「何をしたのかわからない」授業に終始してしまうことが多いのではないだろうか。本研究のように、生命の価値について比較・分類・総合することにより、子どもたちは生命というものの本質に、より具体的に迫り、実感することができ、「なぜ生命は大切なのか」という問いに対して自分の言葉で表現できるようになる。そして、そのような理解があってこそ、道徳的なひとり立ちが促されるのではなかろうか。

(4) この授業で自分は何を学んだかを一人ひとりの子どもに要約させる。

- ① 時間的には10分から20分程度であった。
- ② 2次の終末でワークシートやノートに書かせたり、道徳ノートを家庭に持ち帰り、家族での話し合いを促した後、感想という形で書かせたりした。いずれにしても、自分の言葉と授業中に導き出された言葉、これらをキーワードと呼ぶが、それらのキーワードをもとにして書くように促した。
- ③ 子どもたちは次のような要約をした。
 - ・生きることは大切だと思いました。病氣やけがも治るからどんどん強くなれる。
 - ・生きていくには周りの人のやさしさがいっぱいあるんだなあと思いました。
 - ・人生を進んでいって、命が大きくなるほど輝いていく。
 - ・いっぱいがんばって、いっぱい遊んで、家族に守られて、いっぱい乗り越えて大きくなる。
 - ・家族からパワーをもらって、大きくなる。命をもらって楽しくなったり、うれしくなったり、それがパワーになって、光のパワーが心から出てくる。

・家族を守りたい。自分の命を守る。

- ④ このように、全員が自分なりの言葉で命についてまとめることができた。その中で、家族の支えや友達のやさしさなど、自分が今まで気づかなかった視点について気づき、生命観について補充・深化できた子どもが6割近く見られた。さらに一歩進んで、そのような命を輝かせ、これからも前向きに生きていこうとするような、今後の自分自身の生き方にかかわる記述をしている子どもも2割ほど見られた。このように、おのずと子どもたちは道徳的価値を実感し、自分の生活に結びつけようとする姿が見て取れた。

II 「ぼくのものがたり」の妥当性

- ① 以上のように、子どもたちは今回の学習活動を通して、ふだん意識していない自分の命についてさまざまな観点から見つめ直し、家族も友達も、お互いの命を支え合い、いとおしんでいることを再認識し、自己の生命観を拡充することができたと考えられる。
- ② このことから、本資料は2学年が生命尊重に関して学習するに足る内容を有していると考えられる。

また、本研究では試みに1学年、3学年、4学年でも実践を試みたが、この資料を通しての反応を見ると、1学年と2学年ではその受け止め方に大きな差異が見られた。実態により多少の差異はあるだろうが、やはり同じ低学年でも1年生よりは2年生の方が適切であるということがわかった。また、中学年では、拡充という観点でいまひとつ深まりに欠ける部分が見られ、資料としては不適切であろうとの結論であった。このことからこの資料は2学年で扱うことが適切であると考えられる。

(文責：筑波大学附属小学校教諭 加藤宣行)

「妹の手紙」を活用した授業研究

道徳教育迷求会

I 道徳的なひとり立ちを願った道徳授業の 4つの新しい試みについて

試み〔1〕

学習の焦点をこの一点に迫る発問に絞る。



仮説

子どもは何が問題であるかをしっかりつかみ、積極的に考えようとするのではないか。

- (1) どのような手順で「この一点に迫る発問」に絞ったか。

まず資料分析を入念に行う必要があるだろうと考えた。

資料「妹の手紙」では、「妹は死まで考えたのだろうか?」という大きな問いを抱きながら、資料の分析を行った。兄のことを恨む気持ちを持ち、自分が生まれてきたことが嫌になり、「どうしてお兄ちゃんは元気なのだろう」と自分と兄を比べることがばかりしていた。しかし、妹は星野さんの絵に出会うことで生命観に変化が生じた。「生きていれば人を感動させることができる」「星野さんから生きるパワーをもらった」「自分も何かできる。(後に結婚・出産)」「自分の生命は自分だけのものではない」「私よりもさらに苦しんでいる人がいる」「乗り越えている人がいる」……という妹の心境の変化の部分を「この一点に迫る発問」にしたいと考え、「妹の生命観を変えたものは何だったのだろう」という発問に絞った。

- (2) 「この一点に迫る発問」と子どもの理解力

補助発問が少ないので、どれだけ子どもが資料を理解することができるかという不安がなかったわけではない。しかし、あえて今までのパターンを打ち破ることで、授業者自身が資料と真正面からぶつかることができたように思う。しかし、唐突に「この一点に迫る発問」を発しても子どもはすぐにはわからないだろうと考え、妹の生命観が星野さんの絵や詩を見ることによって大きく変わったことを説明した後、「この一点に迫る発問」をした。

- (3) 子どもの取り組みの様子

「妹の生命観を変えたものは何だったのだろうか」という問いに対して、子どもは真剣に考えた。授業者はワークシートを用意し、書く活動を取り入れた。書く活動を行うことで、自分の考えをまとめ、振り返る時間となった。多くの子どもは自分の考えを文章で表現することにより自分を見つめる時間となった。資料を途中で切ったことと、1つの発問に絞ったことから、いろいろな考えを出せたことが思考の深まりにつながったと思う。

- (4) 考察

これらの授業実践を通じて、「この一点に迫る発問」の条件として次のようなことが考えられるだろう。

- ① ねらいに迫る発問でなければならない。しかも、発問は、ズバッと資料分析に基づいた表現が求められる。
- ② その発問を聞いた子どもの反応がいく通りも生まれてこなければならない。答

6 妹の手紙

妹が母を亡くしたとき、妹は小さいときから母を亡くして、ときどきお母さんの夢を見ていました。ある日、今までにないほど長い夢を見て、入院することになりました。次の日の午後、ぼくは、妹の足元に病院へ行きました。病室のドアを開けようとしたとき、妹が、母に、泣きながらうたえる声を聞きました。

「お母さん、夢いよ……お兄ちゃんはあるに死ななかに、どうしてわたしだけが残ったの、こんなに苦しむのだったら、生まれでなければよかった。」

ぼくは、病室のドアを開けることができませんでした。妹がみんなのことを考えていたのかと思うと、ほんとうにショックでした。さあ、入院中は勉強もできず、妹は無事に退院しました。退院したものの、何となく妹の顔を思い出して、ぼくは、「今日はみんなで絵を見よう」と思った。ある日、父が「今日はみんなで絵を見よう」と言い出した。父は絵を見るのが好きで、よく一人で出かけることがありました。

展覧会の会場には、星野富弘という人の絵が展示されていました。妹は、花の絵を見て、何度も「きれい」とつぶやいていました。

星野さんは、学校の先生をしていたときに、マツ運動の道



りに失敬し、頭から落ちてしまいました。命だけは助かりましたが、骨がいためて骨から自由を失ってしまいました。けれども、必死の努力で文字を書き、絵をかくようになりました。さっかっけは、病院で阿婆だった中学生のために、習字をさせたことでした。そのとき、わずかに動くペンで書いて文字を書きました。それから文字を練習するようになり、いつか絵までかくようになりました。家族の人に絵の具を混ぜてもらい、口に筆をくわえて少しづつ書き上げるのです。

妹は「数」の絵と、そこに書かれていることを見つけました。絵のことはほとんど覚えていないが、妹はその星野さんの絵を見て、何となく「きれい」とつぶやいていました。妹は、花の絵を見て、何度も「きれい」とつぶやいていました。

星野さんは、学校の先生をしていたときに、マツ運動の道



れからしばらくして、また母の夢を見て、涙のように入ってしまった。母がいたときだったのに、どんな思いで生活していたかある日、妹から1通の手紙がきた。

へん、このお母さんが入院したとき、せつなく書いてくれたのに、わたしがお母さんにわがまましたから、部屋に入れたかったの、命のある限り、妹は泣きながら書いてくれました。ほんとうにこの命も人の命も、命の重さは同じだということ。わたしは、たまたま母を亡くしたけれど、お父さんとお母さんからもたらした一つの命だから、命のある限り、妹は泣きながら書いてくれました。

それまで「生きる」とか「命」とかいうことを、空想や本のようにあるたまたまのこととしか考えていなかったぼくにとって、妹の手紙には、考えさせられるものがありました。

それから10数年、妹は病室に、子どもも生まれました。妹がこの世に生み出した新しい命を見るたびに、ぼくは、遠い昔の妹の手紙のことを思い出します。

星野富弘さんの作品をさがして、その生き方につれよう。

▲6年「6 妹の手紙」

えが1つではなく、思考の広がりのある発問が望ましい。

- ③ 子どもの実態に近い、子どもの問いを代弁する内容でなければならない。生活の中から、教師の問いから、資料を読みながら答えを見出すことができ、このような道徳の授業が最終的には学校目標へもつながるような内容を期待したい。

試み〔2〕

この一点に迫る発問に対する子どもの考えを確立するための時間と場を確保する。

仮説

一人ひとりの子どもが自分なりの考えをしっかりと確立できるのではないかと。

- (1) どのような時と場を確保したか。
 - ・「この一点に迫る発問」をして25分の時間をとった。
 - ・自分の考えをワークシートに書くように指示した。
- (2) どのように自分の考えを確立したか
 - ・全員の子どもが自分の考えをワークシートに書いた。

- ・全員の子どもが自分の考えをまとめたのは、今までの授業では考えられないことであった。
- ・授業は、X校・Y校・Z校で行ったが、すべての学校で全員の子どもが反応している。

<ワークシートに書かれた子どもの反応例>

- * 小さな命でも生まれてきたときにはきっと意味があるというふうに見えるようになり、その考え方を学んだ。妹は星野さんの生き方を見て、「自分も星野さんのように生きよう。」という生き方を学んだ。
- * 星野さんは、決してつらい思いをかかないで、生きる大切さや生きる喜びをかいた。その詩や絵を見て、妹は生きる喜びを感じたと思う。あきらめかけていた自分に気づいたと思う。命を落としてしまうより、つらくても、生きたほうがいい。

- (3) 考察

従来の授業では、中心発問のほかに補助発問を用意して、子どもの思考を順番に述べさせてきた。教師が描いてきた授業の流れの通りに子どもが追いついていく観があった。それもほんの一部の子どもだけであった。指導者がしゃべりすぎでいたし、一問一答式の授業の流れであった。これでは、子どもの思考の深まりなど期待できないの

観 点	X 校	Y 校	Z 校
A 人間の力が及ばない生命(神秘性)	1	1	2
B 先祖から受け継がれてきた生命(連続性)	0	2	0
C 限りある生命(有限性)	0	5	2
D かけがえのない生命(唯一性)	0	22	3
E 支え合っている生命(関係性)	13	1	8
F 日々たくましくなっていく生命(発達性)	18	6	3
人 数 (人)	32	37	18

である。

ところが、今までワークシートに自分の考えなど記入することさえできなかった子どもが、「この一点に迫る発問」の授業のときには、自らの考えを自らの力で文章にすることができた。20分前後の思考の時間の中で友達に頼ることができず、児童自身为中心発問だけに向かい、自問自答する中で自分の考えを見つけたのである。もちろん、なかには「この一点に絞られた発問」に対して抽象的な言葉で終わらせている子どもの場合もある。しかし、全員の子どもの自分なりの考えをしっかりと確立したことは大きい。

試み〔3〕

子どもの考えを分析・比較・総合させて道徳的価値から検討させる。



仮説

自分の考え方を認識したり、他者の考えを聞いたり、自分の考えを拡充したりしていくのではないか。

- どのような話し合いがもたれたか。
子どもは、グループごとにワークシートなどに書いた自分の考えを発表し、互いの考えを分類した。上の表がその結果である。
- その結果、どのように自分の考えを道徳的価値から、まとめることができたか。

実践校X校では、子どもの考えを分類した後、「ここから何を感じる?」と子どもに問い、思考する時間を与えた。子どもからは、「①苦しんでいるのは自分だけではない」「②あきらめない→生きる希望」「③家族やその他の人の支え(星野さんも支えになっている)」「④命を落としては父母兄が悲しむ」「⑤命はかけがえのないもの→がんばること、もらった命を大切にしたい」などの意見交換があり、自分の意見と比較したり互いの考えを総合したりする場面も見られた。これは、発問を一点に絞った成果であるといえよう。

(3) 考察

限られた時間の中で自己を見つめ互いの思いを深化させるには、一問一答形式のような授業ではうわべだけの意見交換で終わってしまうことが多い。本研究のように発問を一点に絞ることで、児童の思考も集中し、心の奥深い部分で考えるようになる。もちろん、1つの資料ですべての道徳的価値(AからFまでの観点)を満足させることはできないかもしれない。しかし、生命についての子どもの考えを分析・比較・総合させることにより、生命の発達性・唯一性・連続性などを観点として生命の大切さについて考えることや自分を見つめることができた。これは、道徳的なひとり立ちへの第一歩であり、人間そのものを見つめることにつながるはずである。

試み〔4〕

この授業で自分は何を学んだかを一人ひとりの子どもに要約させる。



仮説

自分の考えがどのように変わったかについてまとめ、これからこのような生活をしたいという意欲をもつのではないか。

- (1) 要約させるのにどれだけの時間を確保したか。
 - ・ 5～10分
- (2) 要約はどのような方法をとったか。
 - ・ ワークシートや道徳ノートへの記入を取り入れた（書く作業を入れることで自分の考えをまとめることができる）。
 - ・ 書くときに「要点をまとめて書きなさい」と指示することが大切。
- (3) 子どもはどのように要約したか(実践例より)。
 - * 学習を通して、今まで気がつかなかった日ごろの生命の大切さがたくさん見つかりました。生命とは、簡単にいえないことですが、これまでに学んだことを言葉でまとめます。たくさんの意見から人の命の重さやそれが今までの経験にたくさん隠れていたこと、将来にもつながることを学びました。この学習をもとにして、これからにつなげたいと思います。
 - * 「生命」って何だろう。授業を終えて考えてみると、「自分だけのものではない」に深く共感しました。だれかが亡くなれば悲しむのは家族だけではなく、友人や生徒も悲しむということをもっているからです（数年前に担任の先生が急死）。「生命」は大切にしようと思いました。
- (4) 考察

自分の考えを確立し、分析・比較・総合

させた後の感想なので、子どもは書く活動を通して自分と向き合っていたように感じられる。それは、要約された文章の言葉一つ一つから感じられた。さらに、思考が深い子どもほど言葉を選び、自分の体験を重ねながら文章で表現している。また、授業の前半で書いた「この一点に迫る発問」の問いに答えた表現とはだいぶ異なっていた子どもが多く見られた。これは、1時間の授業を通して子どもの心に変容があったからだろうと推測できる。

II 『妹の手紙』は6年生の資料として適切かどうかについて

- ① この資料によって、生命尊重に関する観点のうち、どの観点を拡充できたか。
 - 資料分析から、この資料は観点B・Dを含みながらE・Fに焦点が当てられているといえよう。
 - また、児童の中心発問の感想を分析してみると、
 - ・ 作っていく生命（人生というのは楽しいことばかりじゃない。あきらめてはいけない。）
 - ・ 支え合っている生命（家族やその他の人々の支え。命を落としては父母兄が苦しむ。）
 - ・ もらった生命（親からもらった生命。自分への期待。）
 という結果が得られた。
- ② 6年生の資料として適切か。
 - 学級の実態やこれまでの心の耕しの違いによって、すべての学級で同様の結果が出るとは限らない。児童の気づかなかった観点については、今後の授業で指導者が補ったり、別の資料で扱ったりするような手立てを考えれば、本資料は6年生の資料として適切であるといえよう。

(文責：相模原市立藤野小学校教諭 西野幸子)

道徳教育の充実で学校教育の再生を

—これからの道徳教育の課題と展開—

昭和女子大学教授 押谷 由夫

これだけ道徳教育の重要性が叫ばれているのに、学校現場において道徳教育が充実されない。家庭においても、地域においても同様である。なぜなのか。

何かが足りないのである。一言で言えば危機意識。何とかなるだろうでは、何ともならない。そのことを家庭や地域に訴え、学校においても教職員が一丸となって道徳教育に取り組む体制をつくることである。それができないと、どのような教育課程の改善がなされようと絵に描いた餅に終わる。

1. 改正教育基本法が意味すること —道徳教育を中核とした学校教育をつくる

改正教育基本法は、戦後の教育を見直し、これから進むべき教育の基本方針を示そうとするものである。その内容は、当然に学校教育に直接かかわりをもつ。その意味するところを全体にわたってみた場合、道徳教育を中核とした学校づくりを求めていることがわかる。そのことは、特に次の2点から指摘できる。

第一に、教育の目標（第2条）が具体的・体系的に示されたことである。その内容はわが国がどのような人間を育てようとしているのかがわかるようになってきている。それらは、いずれも道徳的価値の育成を基盤としている。

1項は、知・徳・体の調和的発達を述べているが、2項以降は、その中で育むべき道徳

的価値が示されている。さらに言えば、学習指導要領の道徳の指導内容項目の4つの視点に基づいて重点が示されていると捉えられる。

第二に、生涯学習の理念（第3条）が掲げられ、障害教育（第4条の2項）、幼児教育（第11条）、義務教育（第5条）、学校教育（第6条）、大学教育（第7条）、家庭教育（第10条）、学校・家庭・地域連携（第13条）が強調されている点である。

つまり、様々な学校段階、教育の場においてなされる教育改革は、第3条の生涯学習の理念に書かれている「国民一人ひとりが自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう」にするための施策なのである。

このことをまず押さえて、各学校、子ども、保護者、地域の特質や状況を考慮しながら「道徳教育を中核とした学校づくり」を具体化させなければならない。

2. 教師自身が、なぜ今、道徳教育の充実が重要かを熱く語れること

教育基本法が改正されたから道徳教育に力を入れる、というのでは効果は期待できない。道徳教育は心の教育であり、心意気の教育である。心と心の響き合いによって効果的に展開される。道徳教育を充実させるためには、教師一人ひとりが、なぜ今、道徳教育が大切なのかを熱く語れることが不可欠である。

たとえば、今日の社会は、人とかかわらな

くても快適な生活が送れる。個人的わがままが許される社会になっており、そのような中では道徳が極めて育ちにくい。法律がだんだんと厳しくなっているのは、そのことを端的に表している。このままでは、ますます管理的な社会になっていく。今こそ一人ひとりの道徳心の高揚が必要なのである。

また、今日の競争社会は極度のストレスを生む。勝つか負けるか、敵か味方かを常に意識させられる。そのような中においてこそ、互いに信じ合うこと、助け合うこと、協力し合うこと、分かち合うことの大切さを訴えねばならない。

さらに、科学技術教育の重視は、思考形式に重大な変化をもたらす。新しいものに価値をおく思考、客観的・批判的思考の重視である。これらは大切であるが、極度に求められると、古いもの・既存のものが忘れられていく。また、温かな情的思考が無視される。それでは、社会はますます不安になり、人間関係も冷たいものになっていく。科学する心と道徳心との調和が求められる。

社会の安定や心の健康は、健全な価値意識をもつことによって可能になることを、教師は、自分自身の具体的体験をもとに熱く語り続けられることが大切なのである。

3. 道徳教育の今日的課題を子どもたちの姿から見つけ出すこと

次に大切なのが、目の前にいる子どもたちの姿から、道徳教育の今日的課題を把握し、その対処を考えることである。ここでは大きく次の3つを指摘したい。

(1) イライラ感をすっきりさせ、ワクワク感にする

子どもたちの姿で気になるのが、イライラ感である。イライラしていたのでは、心は育たない。心を育てるには、まずイライラ感をすっきりさせ、逆にワクワク感にしていくこ

とが大切である。そのためのポイントとして、特に次の点が挙げられる。

① 心のイライラ感への対応

心の内を思いっきり話すことができること。悩みや喜びを共有してもらえること。そして最も大切なのは、健全な価値意識を育て共有すること。このことを正面から求めるのが道徳の時間である。

② 体のイライラ感への対応

まずは、思いっきり汗を流す、体全身で感じ表現する体験が重要である。そして何より日々の生活を規則正しくできるようにすることである。

③ 頭のイライラ感への対応

わからなかったことがわかるようになること。そのためには、集中してこつこつ続けることが必要である。そのような場と機会を確保する。

④ 未来へのイライラ感への対応

未来に夢や希望がもてること、成長が実感できること、人や社会の役に立てる自分を自覚できることが大切。道徳や教科などの指導において、より重視する必要がある。

(2) 子どもたちの生命力を高める

子どもたちのよりよく生きる力を育てていくには、その根幹にある生命力（生命維持のための根本的な力）を強固にしておく必要がある。

まずは、人間が本来もっている生命維持のための諸機能を活性化させること。食べる、動く、寝るなどである。そのことは、生命のかけがえのなさの自覚や生命があることの喜びへとつながる。そして、感覚器官を研ぎ澄ます（見る、聞く、触れる、嗅ぐ、味わう）。そのことは、相手の立場にたって考える力、共感的に理解する力、豊かな感性や情操の基礎となっていく。また文化や芸術の享受へとつながる。

もう1つ大切なのが、大いなる自然にどっぷり浸ること。自然は生きている。大いなる

息吹を感じることができる。人間の中にある鼓動と響き合うことができる。そして、自然界から大いなるエネルギーをもらうことができる。自然とともに生きる、自然の変化を愛で楽しみながら生活する、といったことは、わが国が伝統的に大切にしてきたことである。そのことが豊かな感性や美意識、心の美しさへとつながっていく。

(3) 集団や社会の一員としての自覚を深められるようにする

これからの変化の激しい社会を主体的に生きるためには、集団や社会の一員としての自覚をもち、ともによりよく生きる力を身につけなければならない。そのためには、特に次のことを心がける必要がある。

① かかわりの中で生きる自分の自覚

自分は、周りに影響を与えられると同時に影響を与える存在でもあることを実感できるようにすることが大切である。

② 集団や社会（文化、自然、人々等）に支えられて生きる自分の自覚

支えられていることの自覚から、集団や社会への感謝（特に家庭、学校、地域社会への感謝）の心を育てるようにすることが重要である。

③ 集団における役割と責任の自覚

そこから、集団や社会の一員として何をしなければならないか、自分に何ができるのかを感じ取り、取り組めるようにする。

④ 集団や社会をよりよくしていくために自分にできることの自覚

そして、お世話になったご恩に報いるということから、夢や大志を描き、自分の可能性にチャレンジしていけるようにする。

4. 学校経営、学級経営の中核に道徳教育を位置付けること

これらをふまえて、学校教育においてどのように道徳教育に取り組んでいくか。中教審

は、新しい教育課程のイメージ図を提案している。それは、生きる力（人間力）の育成に関して、従来どおり「豊かな心」「確かな学力」「健やかな体」の3つを挙げているが、それを構造化して「確かな学力」「健やかな体」を包み込んで「豊かな心」を位置付けている。そのことをどう具体化するかである。

たとえば、各教科の学習活動において、いかに豊かな心を育成するか、日々の健康・体力づくりをいかに豊かな心の育成と結び付けていくかが問われる。それは、各学習活動において、学習の内容にかかわる知的な気づきや興味関心の追究に合わせて、どのような道徳的な気づきや興味関心を喚起させるかがポイントである。その具体的な実践が求められる。

(1) 重点的に指導する道徳的価値の具体的指導計画をつくる

学校における道徳教育は、基本的には道徳の内容項目の指導を全体にわたって行う。このことをふまえて、子どもたちの実態や学校の特質等を考慮し、重点目標を明確にして指導計画をつくっていく必要がある。

従来、道徳教育の全体計画の作成が義務づけられているが、その内容の改善とともに、どう具体化するかに関して、さらに年間の計画が求められる。そして、それを具体するには、実施委員会を組織する必要がある。実施委員会で具体的な実施計画を立て、全員で取り組んでいく体制をつくっていく。また、1～2か月くらいの期間で、特定の道徳的価値の学習に関して、学級での生活をベースとして、各教科等の学習との関連をもたせて道徳の時間を核としながら総合単元的に道徳学習を行うことも積極的に取り組みたい。

(2) 学校・家庭・地域の連携推進協議会を設置する

道徳教育の全体計画の中には、当然、学校・家庭・地域連携に関する事柄が書かれるはず

である。それを具体化するためには、学校・家庭・地域の連携推進協議会を設置し、協力体制を確立していく必要がある。

道徳教育は、子どもだけの問題ではない。また、学校だけの問題でもない。生きている人間全体の課題であり、生活する場全体において取り組まねばならないものである。推進協議会では、子どもたちの道徳性の育成や学校の道徳教育の推進方策等について話し合われることになるが、同時に家庭における道徳教育、地域における道徳教育の充実に関しても議論されるようにする。その中で『心のノート』や『家庭教育手帳』の活用について取り上げられるようにする。そのことを通して、子どもたちの心を知ると同時に、大人自身の道徳性の育成についても語られるようにしたい。

5. 道徳教育のかなめとして道徳の時間が機能するようにすること

道徳的価値の学習は、道徳の時間をかなめとして展開される。道徳的価値を正面から計画的・発展的に学ぶ時間だからである。その性格は次の改訂においても変わらない。その道徳の時間の課題として、特に次の3点が挙げられる。

第一は、道徳の時間を、学級経営、学年経営、学校経営のかなめとすることである。たとえば、道徳の時間を学級経営全体の評価という視点からとらえてみると、道徳の時間を魅力的にするには、人間関係の充実や学級環境、日常生活で価値に触れ心を動かす体験等が大切であることが理解できる。また、学年で協力し、魅力的な授業をつくっていくという取り組みや、校長、教頭の授業参加も具体化されてくる。

第二は、道徳の時間を一人ひとりの豊かな自分づくりのかなめとすることである。道徳教育が人格の基盤である道徳性の育成を目標とすることから、道徳の時間はそのかなめの

役割を果たさねばならない。道徳の時間で学習する全体がわかるようにし、自己評価できるようにする。各内容項目（道徳的価値）にかかわって自己の成長が実感できるようにする。『心のノート』と響き合わせる工夫、道徳ノートの工夫、総合単元的道徳学習の工夫などが求められる。

第三は、道徳の時間を、学校・家庭・地域連携のかなめとすることである。たとえば、教師、子ども、保護者、地域住民が協力して郷土資料や学校資料をつくる（これらは地域、学校の宝物となる）。地域の人材活用、地域への授業公開。道徳の時間を保護者や地域の人と一緒につくっていく。道徳の時間の学習の様子を学校通信や学級通信などで知らせたり、公共施設などでパネル展示などをしたりする、といったことを積極的に行うことなどが求められる。

6. 『心のノート』を活用して、学校・家庭・地域の連携を深めること

『心のノート』は、日本国民としてだれもが身につけねばならない道徳性を、子どもたちの発達段階に応じて理解でき、自ら追い求められるように作成されている。『心のノート』を活用することによって、大人の子どもの理解を深めるとともに、大人自身の生き方を見つめなおすことができる。そして、生活の風土を道徳的なものにしていくことができる。そのような活用が強く望まれる。



人間関係力と道徳①

～キャッチボールとドッジボール～

千葉大学助教授 土田 雄一

1 人間関係力とは

2月にテレビ朝日で「人間関係力テスト」という番組が放送された。さまざまな映像や場面テストから、人間関係力指数を測定する番組である。人間関係力とは「人の気持ちを推し量り、場の空気を読み、笑いや感動を共有する」ことができる能力をさす（番組HPより）。私も視聴した。興味深かった。しかし、このテストだけで、本当に人間関係力を測ることができるだろうか。ある一部を測ることができたとしても、それがすべてではないことはみなさんも承知しているだろう。

私が考える人間関係力とは、「①対人関係を築く知識をもとに、②人とコミュニケーションをとり、③感情の交流をしたり、④協力して活動したりする」力である。

①対人関係を築く知識とは

あいさつ・礼儀を含め、社会生活を営む上で必要なルールやマナーなどの基本的知識をさす。これは道徳とかなり重なる。

②コミュニケーションとは

「言語」と「非言語」からなり、「双方向」のもの。一方的なものは「伝達」であり、コミュニケーションとは言えない。つまり、「発信する側」と「受信する側」の双方に「伝える力」と「受け取る力」が必要になる。受け取るのは話の内容だけではない。「相手の気持ちを聴き取る力」が大切である。これも道徳とリンクする。後述するが、現在の子どもたちはこの

「気持ちを聴き取る力が弱くなった」と危惧している。

③感情の交流とは

喜怒哀楽の感情をお互いに表現でき、受け取ることができる状態。上記の番組で提起された能力と重なる。コミュニケーションと同様、「交流」は「双方向」である。キャッチボールである。これも道徳と重なる部分が多い。

④協力して活動するとは

知識があるだけでは人間関係力があるとは言えない。つまり、実践力があるかどうかである。人と折り合いをつけながら活動できる力である。道徳と同様、実生活でどう生かせるかを重視している。

2 遊びにみる今どきの子どもたち

～バーチャル化・少人数化する遊び～

子どもたちの人とかかわる力が弱くなったと言われて久しい。その要因として、遊びの変化、社会の変化、家庭・地域の変化などが挙げられるが、特に遊びの変化が大きな影響を与えているだろう。

①仲間意識のゆらぎ

いわゆるTVゲーム（以下ゲーム）が子どもたちの遊びを大きく変えた。集団遊びから個別（少人数）の遊びに、対人遊びから対機械の遊びに変わった。男子に多くみられる傾向だ。数人で遊んでいても、それぞれがモバイル型ゲーム機で遊んでいることもある。いっしょに遊ん

でいる感覚が乏しい。時間と空間を共有しているが、「仲間」とは言いづらい関係なのではないか。この傾向は、都会も地方も同様である。

②バーチャル化への危惧

子どもたちの遊びがバーチャル化していることが気になる。最大の問題は何か。「機械は文句を言わないこと」だ。すべて自分の都合だけで遊びが進行する。これでは人間関係力は育たない。対立の中で、調整する力が育ち、人間関係力が磨かれる。

③遊びの少人数化への危惧

子どもたちの遊びが少人数化していることも気になる。昨年、千葉県内のある小学校で行った調査では、休み時間に5人以上の集団で遊ぶ子どもたちよりも、1人あるいは2～3人で遊ぶ子どもたちが多かった。自分の気が合う友達とだけ遊ぶ傾向がわかる。

このような状況で、果たして「人間関係力」は育つのだろうか。

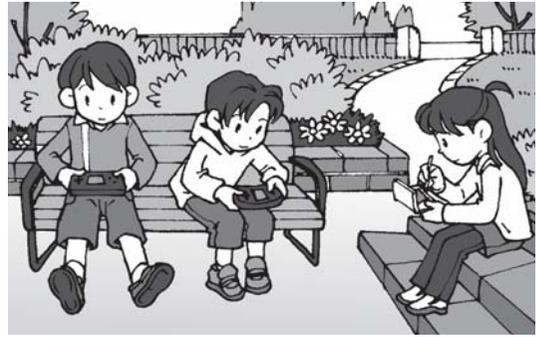
3 「聴く力」を育てる

ここでは、人間関係力の「②コミュニケーション能力」について考えてみよう。言葉が伝えるのは、その内容だけではない。気持ちも伝える。例えば、「いらない」と言ったら、本人が本当に「不要」なのか、「遠慮した＝本当は欲しい」のか、相手との関係の中で「聴き取る」。この言葉にないものを感じる力こそ、大切である。

しかし、この相手の心を聴き取る力が弱まってはいないだろうか。親世代も含めてだが、コンピュータゲームの流行とリンクして、子どもたちの「聴く力」が弱まったと感じる。

4 「キャッチボール」と「ドッジボール」

「コミュニケーションは大切だ」といいながら、私たちは「キャッチボール」ではなく、



「ドッジボール」をしていないだろうか。相手をやっつけようとボール（言葉）を投げていないか。痛いところを突こうとしていないか。

たとえ、相手が暴投（暴言）をしようとも、上手に受け止めて（聴いて）、相手の受け取りやすいところに投げ返すのがキャッチボールである。子どもたちのメッセージをちゃんと受け止めているだろうか。きちんと受け取りやすいように投げ返しているだろうか。

子どもたちのモデルは教師であり、大人である。まず、子どもたちの投げたボールをしっかり受け取り、しっかり受け取れるところに投げ返すことが教師や大人の役割である。

5 人間関係力の基礎は道徳で育てる

すでに気づかれたと思うが、人間関係力の基礎は道徳と重なる。言い換えれば、人間関係力を育てるには、「道徳の充実」が必要不可欠である。

まず、人とかかわりには「思いやり」が大切。相手のことを自分のことのように考えたり、相手の気持ちを推し量ったりする力は、道徳でも育てることができるだろう。

そして、バーチャルではなく、人とかかわる体験がたくさん必要である。しかし、体験するだけでは不十分である。体験を振り返る時間が必要だ。体験を「補充・深化・統合」する場として、道徳の時間が機能する。

道徳の時間は、自分の心と向き合い、自分を磨く時間である。「聴く力」を育て、人間関係力の基礎を育てる時間でもある。

よりよく生きる力を育む

大分県別府市立北小学校校長 佐々木 太恵子

最近の子どもを取り巻く環境の悪化は目を覆うばかりであり、子どもにとって安心・安全な世の中とは言えなくなってしまった。子どもの心の中も見えにくく、ほんのちょっとしたことで傷つく子どもも増えている。子どもたちの心がとてもナイーブになっているのだ。ところが、自分自身はとても傷つくのに、同じことを他の人には平気で言ったり、したりするのはどうしてだろうか。自分の言葉や行動が他人を深く傷つけてしまうことに気がつかないのだ。人とかかわる力や他人を思いやる力が不足しているとも言えるのかもしれない。子どもたちに規範意識がないわけでもないし、モラルが低下しているわけでもないが、知っていることと行動することとが結びつかないことも多い。道徳教育を1時間や2時間したからといって、子どもの心が急に変わるものではない。しかし、今の子どもたちには、人間としての生き方のいいモデルが見えないとも言われる。

本校では、「自己の生き方を追求する道徳教育の展開」として、「かかわりの姿をさぐること」を通して子どもの心に響く道徳授業のあり方を研究課題にしている。今、子どもたちに生き方のモデルをたくさん示し、考えさせるといことはとても大事なことと思う。そして、子どもが自分の生き方を見つめ、共によりよく生きる力をつけていってくれればと願う。

また、資料にしても、より身近に感じられ、自分自身を振り返ることができやすいように地域教材や人材の活用等を取り入れることも有効だろう。私も、昨年、本校6年生の道徳の授業に授業協力者として参加した。授業は、主題名「受け継がれる心」、価値内容は「4

—(6)愛校心」(高学年)である。授業者と事前に打ち合わせをし、終末に入ることになった。校長として、「学校に来るお客さんから校舎がきれいだとほめられたこと」と「卒業生が頑張っただけで床を磨いてきたことと学校に対する思い」を子どもたちに伝えることにした。導入で使う資料は県版の地域教材であり、隣の学校のことなので、より身近に感じられると思ったが、話し合いの段階では、自分のことと結び付けて考えている子が少なかった。しかし、終末に私が授業に入ることによって、自分のこととして考えている手ごたえを感じることができた。授業後の授業者も、「K児にとっては、校長先生の話聞くことで、初めて資料で考えてきた価値と自分の学校生活とが結びついたようである。K児にとって校長先生の話は、話し合いの中で納得できなかった部分を補完する機能を果たす役割を担ったようである」と分析している。発問の投げかけ方や提示のタイミングによっても、早い機会に自分自身のこととして意識づけすることもできたと思うが、子どもたちに身近な学校の校長が授業に参加することで、より自分のこととしてとらえやすくなったことは確かである。

昨年から今年にかけて、たくさんの道徳の授業を見る機会に恵まれた。同じ資料で、同じ発問で扱っているのに、子どもの反応がまったく違う。これは、地域や生活環境、学級の実態、家庭背景も違うのだから当たり前かもしれないが、他の教科ではなかなか考えられないことだ。このように、様々な生活背景をもつ子どもの心に響く道徳授業にするために、様々な工夫をして、子どもに夢や希望を与え、よりよく生きようとする力を育みたいものだと思う。

栃木県の道徳

栃木県小山市立小山城北小学校教諭 渡邊 延幸

1 本県の研究主題

豊かな心で共に生きる子どもを育む道徳教育
～かかわりを深め、子どもの心が動く道徳の
時間～

2 本県の研究の視点

(1) 道徳的価値と自分とのかかわり

○道徳的価値の関連を意識できるように、
関連価値で中心価値を高めたり、道徳的価値
に対する子どもの考えを累積していった
りする。

○ねらいを精選し、道徳的価値を深めてい
く方向を明らかにし、ねらいに合った心に
響く資料を開発する。

○道徳的価値についての問いを設定したり、
導入、展開後段、終末などに時間をかけ、
子どもの考えを表出したりする。

(2) 他とのかかわり

○よさを認めたり、足りないところを補っ
たりする学び合いや役割演技など、友達と
のかかわりから自分の考えを深める。

○子どもが感動したり、感化を受けたりす
るようなゲストティーチャーとのかかわり
や家庭との連携を図る手立てを工夫する。

(3) 道徳の時間と他教育活動とのかかわり

○以前の道徳の時間での学習を生かしたり、
生活や他教育活動についての掲示やワーク
シート、『心のノート』などを活用したり
する。

3 研究についての補説及び私見

①価値の関連を生かすこと

例えば、生命尊重という中心価値を家族愛
という関連価値を生かして深めるといのは、
「家族に大切にされている命」ということに
焦点をあてて、生命尊重の価値を高めてい
くことである。価値の関連を生かすことにより、
子どもは、納得して中心価値を自分のものに

することができ、有効な手立てである。

②ねらいの精選

道徳的価値のどの部分を深めるのか、など
を明確にしたねらいを設定することは、資料
の作成や展開の方向をはっきりさせることにな
る。また、授業の中で達成することと生活
の中で見とっていくことを分けて表記するこ
とで、学びとしての評価も可能になる。

③導入・展開後段・終末の工夫

道徳的価値についての問いを導入でもつこ
とにより、その問いを軸に資料や発問につい
て考えることができる。

展開後段においては、生活とのかかわりが
価値によって違うため、深める内容により時
間を増やしたり、お互いのよさを認め合う活
動などの工夫をしたりすることにより、効果
的に内面化を図れるようにする。

④学び合い

よさの認め合いやアドバイスを中心にした
互恵的なかかわりやお互いの考えをしっかり
聴く聴き合いなど、様々な内容や形態の学び
合いを取り入れることにより、お互いの考え
を高め合おうという意識がもてるようになる。

⑤出会い方・かかわり方

子どもがゲストティーチャーとどう出会い、
どうかかわるかを考えながら展開を構想する
ことで、子どもの心を動かすことができる。

⑥他教育活動との関連

他教育活動を道徳の時間に生かす入口、道
徳の時間で学んだことを他教育活動で実践す
る出口の両方向で手立てを考えていくことで、
より効果的な関連を図ることができる。

4 終わりに

栃木県では、今日もよりよい授業を目指し
様々な実践がくり返されている。新たな試み
は子どもをそして道徳の授業を確かに変える。



善意を踏みにじる

東京都立梅ヶ丘病院院長 市川 宏伸



最近の「おれおれ詐欺」の報道を見ていると、「日本人もここまで来てしまったか」という感がある。本来なら、「子どもや孫が困っているのなら、何とかしてあげよう」という善意が悪用されている。詐欺にあった人に、「私が代わりに取り返してあげましょう」とさらに騙す手口もあるらしい。善意は、他人に対する“思いやり”という、日本人が本来的にもっている“やさしさ”である。かつては、子どもやお年寄りに手を出すことは、“卑怯なこと”であり、人間として“恥ずべき”ことと考えられていた。最近では、本来の日本人のもつ規範は否定され、手段を選ばないことが多くなっている。これまでの考え方では理解できないできごとが多くなっている。

学校でも、「これまでのやり方ではうまくいかない生徒が増えている」という言葉をよく聞く。やはり子どもも変わってきていると考えるべきである。しかし、「子どもだけが変わってしまう世界はありえない」というのが私の感想である。子どもが変わっているのなら、大人も変わっているはずである。確かに「切れやすい」子どもが増えている」ということが言われているが、マスメディアの報道を見ていると、“切れやすい”大人も増えているように思われる。

いつ頃から、こんなことになってしまったかは定かではないが、おそらくバブルと言われる時期と関係ありそうである。バブルの時期を境に、「一生懸命努力すれば報われる」、「一生懸命会社に尽くせば、次第に出世して、会社が一生面倒をみてくれる」という時代が終息し、「何が起きるか分からない」時代に

突入したのであろう。「一生懸命尽くしていても、会社が倒産する」こともあるし、「持っていた土地が急に値下がりする」可能性も出てきた。

「労力を使わず、最大の利益をあげる」ことが美徳な時代に入ってきた。お金を稼ぐことだけが目的となると、手段を選ばずに“金儲け”に走る人も出てきた。社会全体に閉塞感があり、沈滞感が覆っている。確実性が見えなくなっており、一人ひとりが先行き不透明である。「自分がこんな行動をしたら、相手はどう思うか」、「自分が逆な立場であったら、どう感じるか」などという考え方は、はやらなくなっている。

不登校になっている子どもの中には、「相手の気持ちを考えすぎている」と考える子どもに出会う。「相手の立場を考えて行動をとる」ことは、戦前の日本では、美徳とされたはずである。最近では、「相手の気持ちを考えない」子どもの方が生きやすい時代になっているようにも思われる。全員が自分の考え方だけで行動をすれば、社会は成り立たなくなってしまうかもしれないが……。

東京都立梅ヶ丘病院院長。
1982年同病院医員、1998年副院長となり、2003年から現職。『子どもの心の病気がわかる本』『AD/HDのすべてがわかる本』（講談社）、『思春期のこころの病気』（主婦の友社）、『ケースで学ぶ子供のための精神看護』（医学書院）など監修・編著書多数。





第1回 「生命尊重」

福岡県北九州市立小森江西小学校教頭 立川 修司

道徳の用語は むずかしい？

1 連載にあたって

道徳の研修会などに参加すると、「道徳の授業はむずかしいが、指導案を書くのもむずかしい。なぜなら、その用語は専門的(?)でとっつきにくく、抵抗があるから」という声を耳にすることも多いようです。特に、道徳の勉強を始めたばかりの先生には、道徳用語はとても難解に感じられるようです。

確かに私もそのように感じていました。そこで、私はできるだけふだん使っている言葉でもって、道徳について考えたり説明したりするよう心がけてきました。今回、このコーナーを担当するにあたり、ここでも、できるだけ具体的でやさしい言葉で進めていきたいと考えました。

コーヒーでも飲みながら、気軽にお付き合いください。どうぞよろしく_(._.)_

かけがえのない 命とは？

2 生命尊重とかけがえのなさについて

本文を執筆時点で、毎日のように人が人の命を奪うといった、心痛める事件が報道されています。そのたびに、かけがえのない命を大切に教育の必要性が強調されます。

「命はかけがえのない大切なものだから、大事にしましょう」と教えるには、かけがえのなさとはどういうことなのか、子どもにわかるようにすることが、教師のすべき責務です。

私は、このかけがえのなさはX軸Y軸Z軸の三次元(?)で考えるべきだと考えています。

X軸は、一人の誕生から死に至るまでの命です。道徳資料にも、家族に祝福されて誕生し、すくすくと成長する話や、病気やけがを克服して健康に生きる姿を取り上げた話が多く見られます。だれにも一人に一つしかない自分の命の大切さは、まさにかけがえのない

ものです。

Y軸は、受け継ぎつながっていく命です。

ご先祖様と呼ばれる人々から、祖父母、父母から受け継ぎ、子や孫へとつないでいく命のつながりです。人間も生物としての命の連鎖の中にあり、自然の一員でもあることの自覚は大切なことだと思います。

Z軸は、出会いの軸です。命ある間に会おう人とのふれあいのなんと貴重なことでしょう。一期一会という言葉が表すように……。また、人は一人では生きていけないといわれるように、あなたがあるからこその私であるという側面ももっています。^(*)親子として、兄弟姉妹として、友人として、夫婦として、私たちは多くの人と会うことによって生かされていると思うのです。

これら3つの軸の関連性は生命尊重を学ぶベースの部分だと考えます。ですから、各学年の発達段階に応じて教えたり気づかせたりすることが大切になります。

いきいきと生きてこそその 命

3 生命尊重と生きがいについて

ニートや引き籠もりといった若者を引き合いに出すまでもなく、無目的で無気力な若者が増えているようです。

私が子どものころは一日も早く大人になって、やってみたいことがたくさんありました。しかし、今の子どもたちの中には、大人になると大変だからできるだけ長く子どものままだと良いと思っている子も多いようです。

愛する人がいたり、夢や希望に向かって努力したりする人にとっては、自他の命ともかけがえのないものになることでしょう。

命の実感や体感については、紙幅が尽きました。ご容赦ください。

(*)「対他存在」については、大庭 健著『善と悪～倫理学への招待』岩波新書(2006年)を参照。